

二一 右の孫左衛門は村には珍しき学者にて、常に京都より和漢の書を取り寄せて読み耽（ふけ）りたり。少し変人という方なりき。狐（きつね）と親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、まず庭の中に稲荷（いなり）の祠（ほこら）を建（た）て、自身京に上（のぼ）りて正一位の神階を請（う）けて帰り、それよりは日々一枚の油揚（あぶらげ）を欠かすことなく、手ずから社頭に供（そな）えて拝をなせしに、のちには狐馴（な）れて近づけども遁（に）げず。手を延ばしてその首を抑（おさ）えなどしたりという。村にありし薬師の堂守（どうもり）は、わが仏様は何ものをも供（そな）えざれども、孫左衛門の神様よりは御利益（ごりやく）ありと、たびたび笑いごとにしたりと成り。

二二 佐々木氏の曾祖母（そうそぼ）年よ

りて死去せし時、棺（かん）に取り納（おさ）め親族の者集まりきてその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪（も）の間は火の気（け）を絶（た）やすことを忌（い）むがところの風（ふう）なれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裡（いろり）の両側（りょうがわ）に坐（すわ）り、母人（ははびと）は旁（かたわら）に炭籠（すみかご）を置き、おりおり炭を継（つ）ぎてありしに、ふと裏口の方より足音してくる者あるを見れば、亡（な）くなりし老女なり。平生（へいぜい）腰かがみて衣物（きもの）の裾（すそ）の引きずるを、三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、まざまざとその通りにて、縞目（しまめ）にも見覚（みおぼ）えあり。あなやと思う間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとして、裾にて炭

取（すみとり）にさわりに、丸き炭取なればくるくるとまわりたり。母人は氣丈（きじょう）の人なれば振り返りあとを見送（き）りたれば、親縁の人々の打ち臥（ふ）したる座敷の方へ近より行くと思（う）うほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おぼあさんが来た（き）たと叫（こ）びたり。その余の人々はこの声（こゑ）に睡（ねむ）り（を）覚（さ）ま（し）た（だ）打（う）ち驚（おど）く（ば）かり（な）り（し）と（い）え（り）。

○マーテルリンクの『侵入者』を想（おも）い（お）こ（し）む。

二三 同じ人の二七日の速夜（たいや）に、知音（あこび）の者集（あ）まり（て）、夜更（よこ）（ふ）くる（ま）で念（ねん）仏（ぶつ）を唱（な）（と）な（え）立（た）ち歸（か）えんとする時、門口（かどぐち）の石（いし）に腰掛（こしかけ）てあちらを向（む）ける老女（らうにょ）あり。そのうしろ付（つき）正（ただ）しく亡（な）（な）くなりし人（ひと）の通（と）り（な）り（き）。これは数多（あまた）の人（ひと）見（み）た（る）故（ゆゑ）に

誰も疑わず。いかなる執着（しゅうじやく）のありしにや、ついに知る人はなかりしなり。

二四 村々の旧家を大同（だいどう）といふは、大同元年に甲斐国（かいのくに）より移り来たる家なればかくいうとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本国なり。二つの伝説を混じたるに非（あら）ざるか。

○大同は大洞かも知れず、洞とは東北にて家門または族ということなり。『常陸国志（ひたちのこくし）』に例あり、ホラマエという語のちに見ゆ。

二五 大同の祖先たちが、始めてこの地方に到着せしは、あたかも歳（とし）の暮（くれ）にて、春のいそぎの門松（かどまつ）を、まだ片方（かたほう）はえ立てぬ

うちに早（はや）元日になりたればとて、
今もこの家々にては吉例として門松の片方
を地に伏せたるままにて、標縄（しめな
わ）を引き渡すとのことなり。

二六 柏崎の田圃（たんぼ）のうちと称す
る阿倍氏はことに聞えたる旧家なり。この
家の先代に彫刻に巧（たくみ）なる人あり
て、遠野一郷の神仏の像にはこの人の作り
たる者多し。

二七 早池峯（はやちね）より出でて東北
の方宮古（みやこ）の海に流れ入る川を閉
伊川（へいがわ）という。その流域はすな
わち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今は
池（いけ）の端（はた）という家の先代の
主人、宮古に行きての帰るき、この川の原
台（はらだい）の淵（ふち）というあたり
を通りしに、若き女ありて一封の手紙を托

(たく)す。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩(たた)けば宛名(あてな)の人いで来(く)べしとなり。この人請(う)け合いはしたれども路々(みちみち)心に掛りてとつおいつせしに、一人の六部(ろくぶ)に行き逢

(あ)えり。この手紙を開きよみて曰(い)わく、これを持ち行かば汝(なんじ)の身に大なる災(わざわい)あるべし。書き換(か)えて取らすべしとて更に別の手紙を与えたり。これを持ち沼に行き教えのごとく手を叩きしに、果して若き女いでて手紙を受け取り、その札なりとてきわめて小さき石臼(いしうす)をくれたり。米を一粒入れて回(まわ)せば下より黄金出(い)づ。この宝物(たからもの)の力にてその家やや富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度にたくさんの米をつかみ入れしかば、石臼はしきりに自ら回(まわ)りて、つ

いには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、小さき窪（くぼ）みの中に溜（たま）りてありし中へ滑（すべ）り入りて見えずなりたり。その水溜りはのちに小さき池になりて、今も家の旁（かたわら）にあり。家の名を池の端（はた）というもその為（ため）なりという。

○この話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや。

二八 始めて早池峯に山路（やまみち）をつけたるは、附馬牛村の何某という獵師にて、時は遠野の南部家入部（にゅうぶ）の後のことなり。その頃までは土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に仮小屋（かりごや）を作りておりしころ、或（あ）る日炉（ろ）の上に餅（もち）をならべ焼きながら食いおりしに、小屋の外

を通る者ありて頻（しきり）に中を窺（うかが）うさまなり。よく見れば大なる坊主なり。やがて小屋の中に入り来たり、さも珍しげに餅の焼くるを見てありしが、ついにこらえ兼（か）ねて手をさし延べて取りて食う。獵師も恐ろしければ自らもまた取りて与えしに、嬉（うれ）しげになお食いたり。餅皆（みな）になりたれば帰りぬ。

次の日もまた来るならんと思ひ、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじえて炉の上に載せ置きしに、焼けて火のようになれり。案のごとくその坊主きょうもきて、餅を取りて食うこと昨日のごとし。餅尽（つ）きてのちその白石をも同じように口に入れたりしが、大いに驚きて小屋を飛び出し姿見えなれり。のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見たりといえり。

○北上川の中古の大洪水に白髪水というがあり、白髪の姥（うば）を欺（あざむ）き

餅に似たる焼石を食わせし祟（たたり）なりという。この話によく似たり。

二九 鶏頭山（けいとうざん）は早池峯の前面に立てる峻峯（しゅんぼう）なり。麓（ふもと）の里にてはまた前薬師（まえややくし）ともいう。天狗（てんぐ）住めりとして、早池峯に登る者も決してこの山は掛（か）けず。山口のハネトという家の主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友なり。きわめて無法者にて、鉞（まさかり）にて草を刈（か）り鎌（かま）にて土を掘るなど、若き時は乱暴の振舞（ふるまい）のみ多かりし人なり。或る時人と賭（かけ）をして一人にて前薬師に登りたり。帰りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、その岩の上に大男三人いたり。前にあまたの金銀をひろげたり。この男の近よるを見て、気色（けしき）ばみて振り返る、その眼の光きわめ

て恐ろし。早池峯に登りたるが途（みち）に迷いて来たるなりと言えば、然（しか）らば送りに遣（や）るべしとて先（さき）に立ち、麓（ふもと）近きところまで来たり、眼を塞（ふさ）げと言うままに、暫時そこに立ちている間に、たちまち異人は見えなくなりたりという。

三〇 小国（おぐに）村の何某という男、或る日早池峯に竹を伐（き）りに行きしに、地竹（じだけ）のおびただしく茂りたる中に、大なる男一人寝ていたるを見たり。地竹にて編みたる三尺ばかりの草履（ぞうり）を脱（ぬ）ぎてあり。仰（あお）に臥（ふ）して大なる躰（いびき）をかきてありき。

○下閉伊郡小国村大字小国。

○地竹は深山に生ずる低き竹なり。

三一 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらわれて行く者年々多くあり。ことに女に多しとなり。

三二 千晩（せんば）ヶ岳（だけ）は山中に沼（ぬま）あり。この谷は物すごく腥（なまぐさ）き臭（か）のするところにて、この山に入り帰りたる者はまことに少（すく）なし。昔何の隼人（はやと）という獵師あり。その子孫今もあり。白き鹿を見てこれを追いこの谷に千晩こもりたれば山の名とす。その白鹿撃たれて遁げ、次の山まで行きて片肢（かたあし）折れたり。その山を今片羽山（かたはやま）という。さてまた前なる山へきてついに死したり。その地を死助（しすけ）という。死助権現（しすけごんげん）とて祀（まつ）れるはこの白鹿なりという。

○宛然（えんぜん）として古風土記をよむ

がごとし。

三三 白望（しろみ）の山に行きて泊（とま）れば、深夜にあたりの薄明（うすあか）るくなることあり。秋のころ茸（きのこ）を採りに行き山中に宿する者、よくこの事に逢う。また谷のあなたにて大木を伐（き）り倒す音、歌の声など聞（きこ）ゆることあり。この山の大きさは測（はか）るべからず。五月に萱（かや）を苳りに行くとき、遠く望めば桐（きり）の花の咲き満（み）ちたる山あり。あたかも紫（むらさき）の雲のたなびけるがごとし。されどもついにそのあたりに近づくこと能（あた）わず。かつて茸を採りに入りし者あり。白望の山奥にて金の樋（とい）と金の杓（しやく）とを見たり。持ち帰らんとするにきわめて重く、鎌（かま）にて片端（かたはし）を削（けず）り取らんとしたれど

それもかなわず。また来（こ）んと思いて
樹の皮を白くし栞（しおり）としたりしが、
次の日人々とともに行きてこれを求めたれ
ど、ついにその木のありかをも見出しえず
してやみたり。

三四 白望の山続きに離森（はなれもり）
というところあり。その小字（こあぎ）に
長者屋敷というは、全く無人の境なり。こ
こに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その
小屋の垂菰（たれごも）をかかげて、内を
窺（うかが）う者を見たり。髪を長く二つ
に分けて垂（た）れたる女なり。このあた
りにても深夜に女の叫び声を聞くことは珍
しからず。

三五 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採
りに行きて宿（やど）りし夜、谷を隔てた
るあなたの大なる森林の前を横ぎりて、女

の走り行くを見たり。中空を走るように思われたり。待てちやアと二声ばかり呼
(よ)ばわりたるを聞けりとぞ。

三六 猿の経立(ふつたち)、御犬(おいぬ)の経立は恐ろしきものなり。御犬(おいぬ)とは狼(おおかみ)のことなり。山口の村に近き二(ふた)ツ石山(いしやま)は岩山なり。ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、処々(ところどころ)の岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下(した)より押(お)しあぐるようにしてかわるがわる吠(ほ)えたり。正面より見れば生(う)まれ立(た)ての馬の子ほどに見ゆ。後(うしろ)から見れば存外(ぞんがい)小さしといえり。御犬のうなる声ほど物凄(ものすご)く恐ろしきものはなし。

三七 境木峠（さかいげとうげ）と和山峠
（わやまとうげ）との間にて、昔は駄賃馬
（だちんば）を追（お）う者、しばしば狼
に逢いたりき。馬方（うまかた）らは夜行
には、たいてい十人ばかりも群（むれ）を
なし、その一人が牽（ひ）く馬は一端綱
（ひとはづな）とてたいてい五六七匹（び
き）までなれば、常に四五十匹の馬の数な
り。ある時二三百ばかりの狼追い来たり、
その足音山もどよむばかりなれば、あまり
の恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、そ
のめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。さ
れどなおその火を躍り越えて入り来るによ
り、ついには馬の綱（つな）を解（と）き
これを張（は）り回（めぐ）らせしに、竈
（おとしあな）などなりとや思いけん、そ
れよりのちは中に飛び入らず。遠くより取
（と）り囲（かこ）みて夜の明（あけ）る
まで吠えてありきとぞ。

三八 小友（おとも）村の旧家の主人にて
今も生存せる某爺（なにがしじい）という
人、町より帰りに頻（しきり）に御犬の吠
（ほ）ゆるを聞きて、酒に酔いたればおの
れもまたその声をまねたりしに、狼も吠え
ながら跡（あと）より来るようなり。恐ろ
しくなりて急ぎ家に帰り入り、門の戸を堅
（かた）く鎖（とぎ）して打（う）ち潜
（ひそ）みたれども、夜通し狼の家をめぐ
りて吠ゆる声やまず。夜明（よあ）けて見
れば、馬屋の土台（どだい）の下を掘り穿
（うが）ちて中に入り、馬の七頭ありしを
ことごとく食い殺していたり。この家はそ
のころより産やや傾きたりとのことなり。

三九 佐々木君幼きころ、祖父と二人にて
山より帰りしに、村に近き谷川の岸の上に、
大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破
れ、殺されて間（ま）もなきにや、そこよ

りはまだ湯気（ゆげ）立てり。祖父の曰く、これは狼が食いたるなり。この皮ほしけれども御犬は必ずどこかの近所に隠れて見えておるに相違なければ、取ることができぬといえり。

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。草木（そうもく）の色の移り行くにつれて、狼の毛の色も季節（きせつ）ごとに變りて行くものなり。